



■しずおか建築うんちく

静岡新聞の毎週木曜夕刊に連載中の「しずおか建築うんちく」は、なかなかおもしろい。9月9日で第20回になる。毎回写真1枚と600字程度の解説文からなる小さなコラムのようなものだから、見逃してしまいそうだ。しかし毎週木曜が待ち遠しい。

何がおもしろいかというと、一つは、それほど有名ではない建築が登場することにある。文化財として指定されたものではなく、著名な建築家が設計したものでなく、しかし地域の中で存在感を放っている建築が、写真と短い文章でその蘊蓄^{うんちく}を語っている。名もなく謂れも知られていない建築が多い。われわれ建築士が知らないものであれば、一般の読者にとってはなおさら興味がそそられるだろう。

もう一つのおもしろさは、毎回違う人が執筆していることである。だから毎回異なった切り口で蘊蓄が語られている。意外な人が意外な語り口でまとめているものもあると言えば、失礼だろうか。思いがけない発見もあるということである。

■連載の発端

この連載の発端は、静岡新聞の記者が前触れもなく突然、こういう企画を考えているが建築士会で受けてもらえないか、と依頼があったことにはじまる。昨年11月初めのことである。それは「明治から昭和初期にかけての県内の名建築の来歴、見どころを、地域の建築の専門家の目から紹介する」というものだった。

本会総務会で検討した結果、担当は景観整備機構がよい、ということになった。

景観整備機構委員会は企画を受け入れ、さっそく連載するための準備にとりかかった。

■自ら手を挙げてもらう

新聞に載るということは、一般市民の大勢が読むということであり、本会の会誌や報告書と違うところは、言わば商品であるということである。読んでもらえる文章でなければならないのだ。かつ内容に

は責任が伴ってくる。したがって自ら執筆したいという意志が必要であると考えた。

ブロックを通じて各会員に呼びかけると同時に、H20から開始している「地域文化財専門家」の研修生にも働きかけた

■連載は1年50回

今年2月初めには各地域から次々と手が挙がってきて、50件に達した。1年間毎週連載するには、ちょうど50回となる。静岡新聞社は当初10回以上、何回になるかは協議するとしていたが、機構委員会は50回を要望した。

そのためには内容のあるものが継続されなければならない。さすが建築士会だと評価を受けるものでなければ、連載は続けてもらえない。そこで、最初に50回を決めるのではなく、50件の中からとりあえず20回を決めることとした*。

そして執筆要領と留意事項を作成し、執筆者に理解を願った。文責は執筆者とし、1枚の写真は執筆者が撮影すること、また新聞掲載について建物所有者の承諾は執筆者が行うこととし、所有者との信頼関係に基づき執筆することが求められた。

■建築が市民に寄り添っていく

新聞の夕刊に毎週1回、毎回異なる本会会員が建築の蘊蓄を語っていく・・・これは建築士会を一般市民へ広報する大きな力であると思う。この連載が多くの人に読まれ、建築の見方や感じ方が理解されていけば、建築が市民の間で評価されていくことになると思う。本会の会員が毎週新聞に登場するという機会は、考えてみれば画期的なことではないか。建築が市民に寄り添っていくことを、この連載は実践しているのである。

(景観整備機構 副代表 塩見寛)

*連載は現在、第35回(H23.1.6)まで決まっている。残りの15回は今年11月くらいまでに決定したい。ブロックを通じて改めて執筆の募集をする予定である。